

国語科における単元内自由進度学習の開発

——個別最適な指導を目指して——

The Development of Flexible Pacing Instruction in Japanese Language Classrooms: For the Individual Most Suitable Instruction

田村 竜士^{※1}

※1 和歌山市立伏虎義務教育学校 わかやま子ども学総合研究センター特別研究会員

小学校国語科6年生「『永遠のゴミ』プラスチック」において、「個別最適な学び」を目指すべく学習手法の一つ、単元内自由進度学習を取り入れた授業の開発と実践を行った。この実践を通し、国語科において単元内自由進度学習を行うことで、一人一人の児童が主体的に学習を進められたことは一定の成果を得たといえる。

キーワード：国語科、単元内自由進度学習、個別最適な学び、小学校

1 はじめに

本稿は小学校6学年の国語授業における授業実践に関して報告するものである。

まず、筆者の勤務校の「目指す子供像、および、研究主題、副主題」について述べていく。

勤務校では目指す子供像を具体的にホップ期（1～4年）・ステップ期（5～7年）・ジャンプ期（8～9年）に分けて示している。ステップ期のテーマは、「誰に対しても思いやりをもち、相手の立場に立って行動できる子」「共に学び合い、考えを広げ、深める子」「自ら考えた、より高い目標に向かって、がんばりぬく子」としている。

勤務校では「自ら問い、自ら考える子どもを育てる小中一貫教育の在り方」という研究主題を2016年の開校より掲げている。これは勤務校が、和歌山県で唯一（令和7年度現在）の公立小中一貫校で、小中一貫教育について研究していく責務を担っており、また、9年間の教育を見据え、予測不能な社会に出て活躍していく力を育成するためには、どのような系統性をもった指導が効果的であるのかについて考える必要がある、と認識しているからである。2023年には、目の前の子どもたちが自ら問い、自ら考えられるようにするためには何ができるようにならなければならない

のか職員全員で考えた。その結果、「正解にこだわってしまっていること」「知識を活用していくことに積極的でないこと」が浮き彫りになった。この現状を踏まえ、唯一の正解にこだわらず、常に問い続ける姿勢をもたせるための批判的思考力、また、学んだ知識を活用していく意識をもたせるために自己表現する場の設定が大事であると考え、研究副主題として、「批判的思考を通じた自己表現」を設定した。

次節以降では、小学校6学年国語科の授業実践における児童の姿を中心に、6年生の児童が主体的に学習に取り組むことをねらいとした授業づくりについて考えを述べていく。そのうえで、取り組みの成果と課題について筆者の考えを報告するものである。

2 問題の所在と研究目的

2.1 問題の所在

近年、AI技術などにより、急激な勢いで社会は変化している。教育現場では10年前には考えられなかった一人一台パソコンをもつ「GIGAスクール構想」が文部科学省から令和元年に発表された。平成29年告示の小学校学習指導要領では「生きる力」として具体的に育成すべき資質・能力が「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学

びに向かう力・人間性等」の三つに整理された。そして、資質・能力を育成するにあたって、各教科等の指導では、児童生徒の「主体的・対話的・深い学び」の実現に向けて授業改善が求められている。中央教育審議会答申（2021）は、「すべての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現」を示した。これは当時、同じく中央教育審議会答申（2021）の「新型コロナウイルス感染症の感染拡大による臨時休業の長期化により、多様な子供一人一人が自立した学習者として学び続けていけるようになっているか」という点が改めて焦点化されたところであり、これからの学校教育においては、子供がICTも活用しながら自ら学習を調整しながら学んでいくことができるよう、『個に応じた指導』を充実することが必要である」という考え方から着想されたものである。そのうえで「指導の個別化」と「学習の個性化」を含み込んだ「個別最適な学び」が示された。

中央教育審議会答申（2021）によれば、「指導の個別化」とは、「すべての子供に基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等や、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するためには、教師が支援の必要な子供により重点的な指導を行うことなどで効果的な指導を実現することや、子供一人一人の特性や学習進度、学習到達等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うこと」とされている。

「学習の個性化」は、「基礎的・基本的な知識・技能等や、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力等を土台として、幼児期からの様々な場を通じての体験活動から得た子供の興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じ、探求において課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現を行う等、教師が子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が、学習が最適となるよう調整する。」こととされている。これらの考え方により、児童一人一人の特性に応じて指導することが求められていることが分かる。

しかし一方でベネッセ教育総合研究所（2022）によると、「小学4～6年生のうち、上手な勉強のしかたがわからない、と回答している割合は61.1%」という結果が出ており、また、この結果は上昇傾向であることも示されている。「子供自身が、学習が最適となるよう調整する」ことを狙い、

GIGA スクール構想が始まっているが、「上手な勉強の仕方が分からない」結果になっている原因の一つが「教師が学習方法を教えていないこと」と友田（2024）は示唆している。

そこで本稿では、実践を通して、学び方を身に付けながら、個に応じた学習ができるための指導の在り方を提案する。

2.2 単元内自由進度学習

「個別最適な学び」を実現するための学習方法として「単元内自由進度学習」を取り入れる。単元内自由進度学習とは、愛知県東浦町立緒川小学校で開発された実践方法である。

2.3 研究の目的と方法

本研究では、国語科における個別最適な学びの実現に向けて、単元内自由進度学習を取り入れた国語科の教材を開発する。また、開発した教材を実践し、授業後のアンケートや児童の様子をもとに、教材の効果や課題について筆者の考えを述べていく。

3 授業実践について

3.1 児童について

読むことに関して

本校では、「わかやま創造科（総合的な学習の時間）・生活科」の研究を開校より進めてきており、本学級の児童も様々な体験活動を経験してきている。学習者は、4年生の時には、「わかやま創造科」の時間に、市内にある磯ノ浦海水浴場でフィールドワークを体験したり、プラスチックごみに関する知識を講師の説明から得たりしている。

国語科においては、今年度1学期に「イースター島にはなぜ森林がないのか」「インターネットの投稿を読み比べよう」という教材を学習している。「イースター島にはなぜ森林がないのか」では、文章の構成をとらえ、要旨を確かめる学習をおこなった。また「原因」

と「結果」との関係に着目し、筆者の主張を明確にし
ていった。

「インターネットの投稿を読み比べよう」では、資
料同士を比較し、どの表現が説得力をもちやすいか、
考えた。

書くことに関して

令和7年度は、社会科、わかやま創造科、学級活動
の時間に修学旅行のしおり作りや、歴史上の人物新聞
作り、お店のポップ作りに取り組んでいる。その際、
インターネットで調べたことをもとにして文章に表し
ている。国語科においては、「書く」を主たる目標にお
いての学習をまだ行っておらず、本単元が初めてであ
る。

教材文の特性

授業者が考える「『永遠のごみ』プラスチック（読
む）」「発信しよう、私たちのSDGs（書く）」の魅力は
以下の6点である。

- ①資料ページが独立して掲載されており、見やす
い。（読む）
- ②「最初に」「次に」のように列挙の接続語が書かれ
ているため、構造を理解しやすい。（読む）
- ③4年生の時に、社会科やわかやま創造科でプラスチ
ックごみについて探求しており、内容面について
知識があるため、思考を促しやすい。（読む）
- ④具体的な数値が書かれており、納得しやすい。（読
む）
- ⑤読むこと②の魅力同様に、内容面について知識が
あるため、思考を促しやすい。（書く）
- ⑥身近な問題に感じられる項目もあり、主体的に学
びに向かいやすい。（書く）

3.2 学習指導案（6年「永遠のごみ」プラスチ ック）

日時 2025年
対象 6年生

単元名「2030年まであと5年
～〇〇に伝わるようにSDGsを宣言しよう～」
教材名「永遠のごみ」プラスチック

保坂 直紀 文

「発信しよう、私たちのSDGs」

【東京書籍・新しい国語六】

○単元の主たる指導目標

身近な問題と関連付けて文章を読み、自分の思いを伝え
るポスターをつくらることができる。

○単元で取り上げる言語活動

SDGsへの思いを、それぞれの表現方法で表す。

○評価規準

●知識・技能

・情報と情報の関係づけの仕方、図などによる語句と
語句との関係の表し方を理解し使っている。【(2)

イ】(読むこと)

・思考に関わる語句の量を増やし、話や文章の中で使
うとともに、語句と語句との関係、語句の構成や変化
について理解し語彙を豊かにしている。また、語感や
言葉の使い方に対する感覚を意識して、語や語句を使
っている。【(1) オ】(書くこと)

・情報と情報との関係づけの仕方、図などによる語句と語
句との関係の表し方を理解し使っている。【(2) イ】(書く
こと)

●思考・判断・表現

・「読むこと」において、目的に応じて、文章の中から
必要な情報を取捨選択したり、整理したり、再構成し
たりしている。【C(1) ウ】(読むこと)

・「読むこと」において、文章を読んでまとめた意見や感想
を共有し、自分の考えを広げている。【C(1) カ】(読むこ
と)

・「書くこと」において、目的や意図に応じて、感じた
ことや考えたことなどから書くことを選び、集めた材
料を分類したり関係づけたりして、伝えたいことを明
確にしている。【B(1) ア】(書くこと)

・「書くこと」において、資料を引用したり図表やグラフを
用いたりして、書き表し方を工夫している。【B(1) エ】
(書くこと)

●主体的に学習に取り組む態度

- ・進んで複数の情報を関係づけて読み、学習の見通しをもって自分の考えを深めようとしている。(読むこと)
- ・進んで情報を集め、学習の見通しをもって相手や目的に応じてパンフレットで情報を発信しようとしている。(書くこと)

単元計画 (読むこと)

第一次 (2時間)

- ①「永遠のごみ」プラスチックの本文を読み、問いを作る。
- ☆②問いを解決する。

第二次 (3時間)

- ☆③何が書かれているか話し合いながら、序論本論結論に分ける。
- ☆④資料1・2はどの段落と関連しているか考え共有する。
- ☆⑤どの表現が納得できる・してもらいやすくなるか考え、共有する。

単元計画 (書くこと)

第0次

- ①SDGsに対する既習事項を想起し、「行動宣言」をすることを確認する。

第一次 (5時間)

- ①、②相手を意識しながら本やインターネットから資料を探す。
- ③資料に合うように「行動宣言文」を考え、「SDGsクラブ」に投稿する。
- ④、⑤資料と「行動宣言」を関連付けて、ポスターやスライドなどを作成していく。

3.3.1 自由進度学習を進めるための手立て①

～複合単元としての展開～

本実践では、『「永遠のごみ」プラスチック』と「発信しよう、私たちのSDGs」を読むこと、書くことの複合単元として取り扱う。「読む」では主に「C(1)ウ」を、「書く」では主に「B(1)ア」をねらうこととする。それらを達成するためにまず、伏虎義務教育学校(2024)に書かれている「伏虎レンズ」の

②を働かせる。②とは「論理的思考」のことであり、ステップ期(6～7年生)段階では、「根拠と自分の考えをつなぐ理由を組み立てることができる」としている。相手意識をもちながら必要な情報を取捨選択し、自分の考えをどのように組み立てられると伝わりやすくなるのか、考える力を育むことをねらった。

学習の進め方は表1に示している。「☆」は自由進度学習で進めた時間である。例えば、「読む②」を学習する児童もいれば、「読む③」をしたり、「書く①」を進めたりする児童もいる。自らの進度や学習の進め方に自由度をもたせている。

表1 単元計画表

「読む」	「永遠のごみ」プラスチック	2030年までにSDGsを宣言しよう	発信しよう、私たちのSDGs	「書く」
			①SDGsに対する既習事項を想起し、「行動宣言」をすることを確認する。	第0次
第1次	①「永遠のごみ」プラスチックの本文を読み、問いを作る。 ☆②問いを解決する。			
第2次	☆③何が書かれているか話し合いながら、序論本論結論に分ける。 ☆④資料1・2はどの段落と関連しているか考え共有する。 ☆⑤どの表現が納得できる・してもらいやすくなるか考え、共有する。		①～②相手を意識しながら本やネットから資料を探す。 ③資料に合うように「行動宣言文」を考え、「SDGsクラブ」に投稿する。 ④～⑤資料と「行動宣言」を関連付けて、ポスターやスライドなどを作成していく。	第1次
			⑥それぞれの相手に発信する。	第3次

3.3.2 自由進度学習を進めるための手立て②

～言語活動の自由度～

「発信していく」ということを学習の目標に置くことで、読む目的・書く目的が意識付けられ、学びが自走すると考える。本実践ではよりその効果を高めるために「単元内自由進度学習」を取り入れる。友田

(2024)には、「学習方法を理解している子ほど学習意欲や成績が高い」とし、また、「身に付けた学習方法は、学習成績だけではなく、生涯にわたり課題を乗り越えていく力になっていく」と記されている。本実践で「単元内自由進度学習」を取り入れるのは、多様な選択肢を与えたり、自己決定場面を増やしたり、また学びの主体は自分たちということを自覚させたりすることをねらいとしつつ、追究の質を高めるためである。

本実践でいう多様な選択肢とは、「発信する相手」「まとめ方(発信の仕方)」「学び相手」「まとめるタイ

ミング」など様々である。「発信する相手」や「まとめ方」を選択するとことで、「伏虎レンズ」の④発信力（自分の考えを整理し、わかりやすく伝えることができる）を働かせ、より適当な文章やそれに関連した資料を探そうとする力を養う。また、「学び相手」も選択ができるので「伏虎レンズ」の⑧協働性（他者と交流し、自分の考えを広げたり深めたりすることができる）を働かせ、積極的に交流するように促していく。

「発信する相手」にどのような「まとめ方」で伝えるのが適当か、「読む」単元で様々な「学び相手」から培った学びを「書く」に活かしていく姿を期待する。

奈須（2022）によると、「与えられた時間を上手にやりくりし、今現在の自分にとって最適な学びを効果的に実現できるよう様々な計画を実際に試してみる機会が存分に与えられることは、メタ認知や学習の自己調整能力、さらに学び方の得意を見出すうえでとても大切なことなんだ。」と記されている。与えられた時間をやりくりし、自分のタイミングで「まとめる」ことで、自己調整能力等への関りをねらうものとする。

3.4 授業展開

書く④から単元は開始された。④では、「SDGs」を知っているか問うところから始まった。全員「SDGs」について知っていた。しかし、誤った認識があることにも気付いた。例えば目標②「飢餓をゼロに」は児童の認識では日本では達成できている（飢餓は0%）と考えていたが、ELEMENIST（2025）を見てみると、「各国の研究者が2017年～20年にかけて実施した『第7回・世界価値観調査』によると、日本では18歳以上の国民のうち9.2%、つまり10人に1人が「この1年間で十分な食料がない状態で過ごした

ことがある」と回答している』と記されており、「自分たちの認識は間違っており、学習し直さなければいけない。」という問題意識をもつことができた。そこで公益財団法人日本ユニセフ協会の公式サイト、「SDGsクラブ」を示し、どの目標を探求していくかを決めること、探求したことを同サイト内にある「みんなの行動宣言」に投稿するという、を学習目標に設定した。

次に「永遠のゴミプラスチック」を読み、「SDGsを広めるため」「SDGsクラブでみんなの行動宣言に投稿するため」には、どのような課題を解決していけばいいかという視点で課題を考えていった。図1は児童が考えた課題の一覧である。

- ①何が書かれているか話し合いながら序論・本論・結論に分ける
- ②資料1・2はどの段落と関連しているか考える
- ③どの表現が納得いくか考える

図1 児童が考えた課題

次の時間からは、単元内自由進度学習の扱いである。表1で示したように、「読む」では②～⑤、「書く」では①～⑤の学習を児童自身が学習するタイミングを選択し、進めていく。その際、どの児童がどの課題をクリアしたか、児童同士が共有できれば、話し合いが自然と起こると考え、グーグルスプレッドシートを活用し、インターネット上で確認できるようにした。図3で示しているように、進捗状況を「まだ」「考え中」「解決」の三つの状態を選択できるようにしている。「考え中」同士で集まったり、「考え中」の児童が、「解決」の児童に話しかける様子が多くみられた。

進める課題がそれぞれなので、従来の授業のように、一律のワークシートを毎時間配るのは不可能である。そこで、

しよう。▼	何が書かれているか話し合いながら、序論本論結論に分ける。	資料1・2はどの段落と関連しているか考え共有する。	どの表現が納得できる・してもらいやすくなるか考え、共有する。	資料に合うように「行動宣言文」を考えて、田村チェックを受ける。	田村チェックを受け、「SDGsクラブ」に投稿する。	資料と「行動宣言」を関連付けて、ポスターやスライドなどを作成していく。	誰に伝える
解決 ▼	解決 ▼	解決 ▼	解決 ▼	解決 ▼	解決 ▼	考え中 ▼	家族(お母さんと)
解決 ▼	解決 ▼	解決 ▼	解決 ▼	解決 ▼	解決 ▼	考え中 ▼	小1
解決 ▼	解決 ▼	解決 ▼	解決 ▼	解決 ▼	解決 ▼	まだ ▼	家族
解決 ▼	解決 ▼	解決 ▼	解決 ▼	解決 ▼	解決 ▼	解決 ▼	小1
解決 ▼	解決 ▼	解決 ▼	解決 ▼	解決 ▼	解決 ▼	まだ ▼	小1
解決 ▼	解決 ▼	解決 ▼	解決 ▼	解決 ▼	解決 ▼	考え中 ▼	家の人
解決 ▼	解決 ▼	解決 ▼	解決 ▼	解決 ▼	解決 ▼	考え中 ▼	家族

図2 スプレッドシートを活用した、進捗表

どの課題を進めても自分の考えを書き込めるようなワークシート (図 3) を用意した。また、自分で進めていけるように、書き込み方を示した見本 (図 4) も用意した。

課題を解決した児童は成果物を完成させていった。初めに示したように「SDGs を広める相手」「まとめ方 (紙媒体・パソコン…)」を自由に選ばせた。ただし、児童には評価規準として「相手に合わせてまとめられているかどうかを見る」ということを伝えている。例えば、小学1年に伝えたい児童は、平易な語彙を選んだり、文字サイズを工夫したりしないと伝わらない。逆に大人が相手だと、平易な言葉ではなく、難しい言葉や漢字を使わないと逆に伝わりにくくなる。実際に児童たちは、相手を意識しながら成果物を作る様子が見られた。

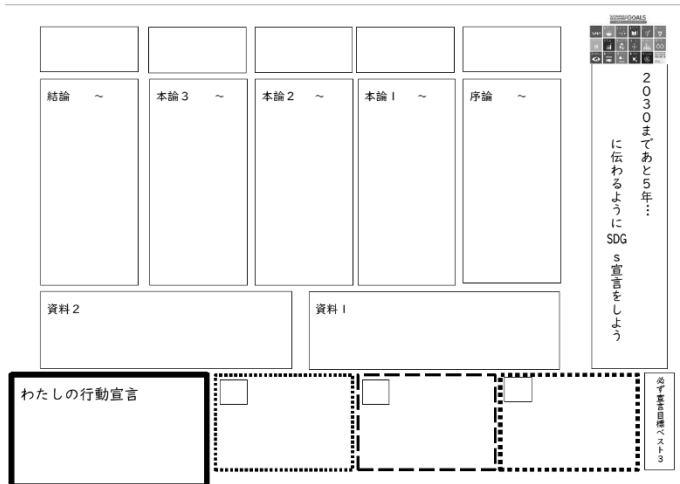


図 3 どの課題からでも考えを書き込めるワークシート

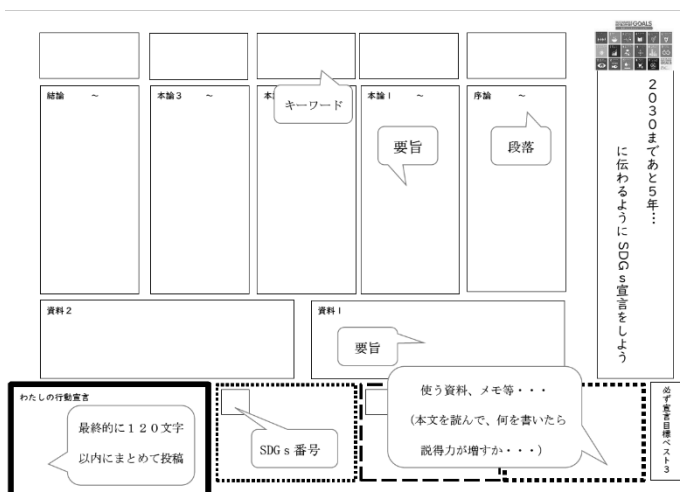


図 4 書き込み方を示した見本

3.5 成果物

児童 A (図 5) は大人を意識してポスターを作製した。強調したい言葉を、色をつけて書いている。また、「読む」で学んだように資料と文章を関連付けて書くことができている。

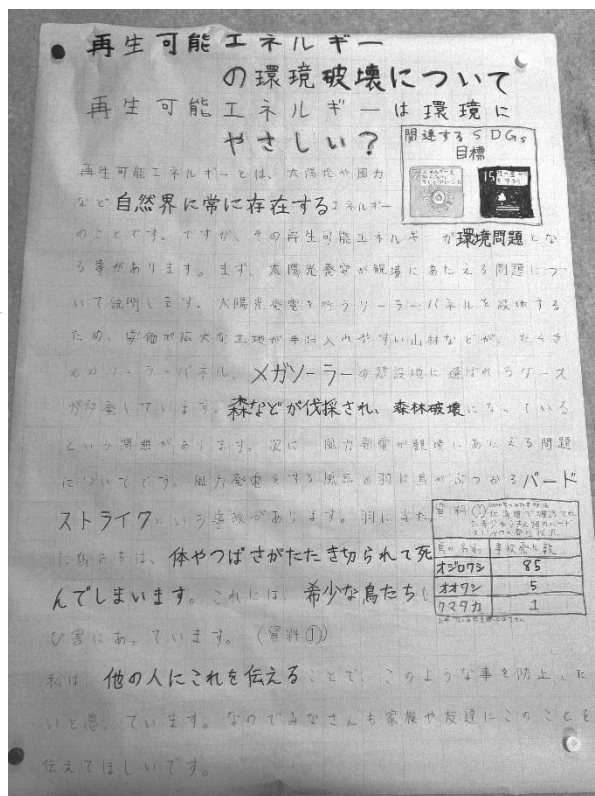


図 5 児童 A の成果物

児童B (図6) は伝える相手を小学5年と設定した。文字量が多く見づらい箇所もあるが、児童A と比べると、四コマ漫画を書き込み、SDGs に親しみやすくする工夫をしていることが分かる。

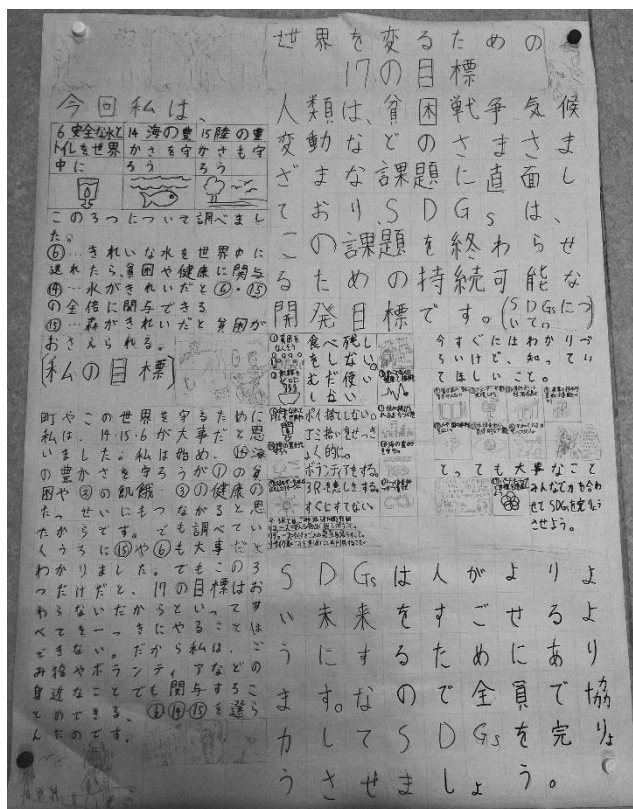


図6 児童B の成果物

4 授業後アンケートの分析

授業後に児童全員を対象にアンケートを行った。質問項目は全部で4項目である。その内①から③は選択式、④は記述式である。アンケートは Google form を使って行った。図7は授業後アンケートの質問項目をまとめたもので

- ①いつもと違う進め方でしたが進めやすさはどうでしたか。
 - 1. 進めやすかった 2. まあまあ進めやすかった 3. ちょっと進めにくかった 4. 進めにくかった
- ②どのやり方がよかったですか。(複数回答可)
 - 1. スプレッドシートでみんなの進み具合が分かる 2. キャンバで序論・本論・結論を分けられるようにする
 - 3. 発信する方法自由 4. まとめる方法自由 5. 掲示物に課題が書かれている
 - 6. 本の資料をいつでも手に取れる 7. ワークシートにいつでも書き込める
- ③いつもの進め方と今回の進め方どちらがいいですか。
 - 1. いつもみたいに全体で話し合いたい 2. 今回みたいに進めたい 3. どちらも混ぜて進めたい
- ④③のように答えた理由はなにですか。(記述)

図7 授業後アンケートの質問項目

ある。

設問①「いつもと違う進め方でしたが進めやすさはどうでしたか。」では、「進めやすかった」と回答した児童が20人、「まあまあ進めやすかった」と回答した児童は3人、「ちょっと進めにくかった」「進めにくかった」と回答した児童はそれぞれ1人ずつと回答している(表2)。9割の児童が「進めやすかった」または「まあまあ進めやすかった」と回答していることから、概ね進めやすかったと感じていることが分かる。

設問②「どのやり方がやりやすかったですか」では、25人中24人が「スプレッドシートでみんなの進み具合が分かる(図3参照)」と回答している。このことから、図3の有用性が高いことが分かる。「発信する方法自由」には25人中23人回答している。実際に従来の図5、図6のように紙で必ずまとめることを指示するのではなく、Google スライドや Canva でまとめる児童もいた。

設問③「いつもの進め方と今回の進め方どちらがいいですか。」では、「いつもみたいに全体で話し合いたい」と回答した児童が4人、「今回みたいに進めたい」と回答した児童が7人、「どちらも混ぜて進めたい」と回答した児童が14人である(表4)。図8の記述には、「みんなの振り返りを発表する時間があったらいいと思います。今回の進め方だと機会をゲットしにくかった。」や「一回くらいみんなで意見をまとめる?的なことをやってもっと他の人の意見も、聞きたいなと思いました。話を聞くと安心もできるし、意見も広がるからです。」といった意見が書かれている。このことから、「どちらも混ぜて進めたい」という意見が半数以上集まったものだと考えられる。

表2 設問①の回答数

選択肢	回答数 (人)
進めやすかった	20
まあまあすすめやすかった	3
ちょっと進めにくかった	1
進めにくかった	1

表3 設問②の回答数

選択肢	回答数(人)
スプレッドシートでみんなの進み具合が分かる	24
キャンバで序論・本論・結論を分けられるようにする	10
発信する方法自由	23
まとめる方法自由	19
掲示物に課題が書かれている	19

表4 設問③の回答数

選択肢	回答数 (人)
いつもみたいに全体で話し合いたい	4
今回みたいに進めたい	7
どちらも混ぜて進めたい	14

・1日の最後に振り返りをするのが、最後まで終わっていない時もあるから。そのタイミングも自由できるようにできれば今回のような形でいいと思いました。

・みんなの振り返りを発表する時間があつたらいいと思います。今回の進め方だと機会をゲットしにくかった。

・勉強の仕方を最初に教えてもらえたから進めやすかったです。

・序論・本論・結論を決める時で人によって場所が違うから自分がここだと思っても少し間違っていないか不安になってしまうことがあります。そこに簡単なヒントがあれば個人的にはやりやすいです。

・一回くらいみんなで意見をまとめる?的なことをやってもっと他の人の意見も、聞きたいなと思いました。話を聞くと安心もできるし、意見も広がるからです。

・別の人のスプレッドシートを間違えて変えてしまうことがあったからドキドキしました。

図8 設問④の記述の例

5 まとめ

5.1 成果

- ・自分のペースと責任で学習を進めることができることで、意欲的に学習に取り組めた。
- ・学習目標がはっきりしているため、情報収集を効果的に行えた。
- ・教師の評価を受ける機会が増え、学習内容のつまずきが減った。
- ・授業後のアンケートより、自由進度学習を取り入れた学習は児童にとって進めやすく安心できるものになった。

5.2 課題

- ・自由進度学習だけでは、学習の定着が難しい。
- ・児童同士の練り合いの場を強制的に設定していないので、知識・技能、思考力等の定着が充分でない児童は、高い児童と比べて差が開きやすい。

・14%の児童がこの授業形態ではなく、全体での話し合いを求めている。

上位 50&下位 10 一覧、日本は 19 位』

<https://elemminist.com/article/4249> 2025 年 10 月 9 日閲覧

5.3 今後の展望

今回行った実践では、児童に学習する目標は設定したうえで、順序・手段を選択させた。しかし、児童の資質・能力を育むためには、児童が選択する「学び方」をさらに明確に、かつ、数を増やしていく必要がある。小林 (2024) は「1 時間の授業の中で複数の思考ツールを選択し、使用できるようにすると、個人追究の後、学習者は思考内容とともに思考方法についても自分とは異なるものに触れることができ、追究の質を高めていくことができます。」と述べている。今回の実践では学び方を明確にすることに注力できなかった。今後は、学ぶ順序だけでなく、思考ツールなどの手法を用意し、選択できるようにしたい。主体的に力のつく学びが実現できるよう、今後も児童への効果的な指導や方法を探求するよう努めていくものとする。

引用・参考文献等

- 小林康宏 (2024) 『「言葉による見方・考え方」とは何か』 明治図書
- 中央教育審議会答申 (2021) 『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～ (答申)』 中教審第 228 号
- 友田真 (2024) 『自ら学びをコントロールする力を育む 自己調整学習』 明治図書
- 奈須正裕 (2022) 『個別最適な学びの足場を組む』 教育開発研究所
- 伏虎義務教育学校 (2024) 『令和 6 年度和歌山市指定教育研究学校研究紀要』 第 8 集 pp.3-9
- ベネッセ教育総合研究所 (2022) 『小中高校の学習指導に関する調査 2022』
https://benesse.jp/berd/shotouchutou/research/detail_5812.html 2025 年 12 月 23 日閲覧
- 文部科学省 (2017) 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示)』 東洋館出版社
- ELEMENIST (2025) 『2025「SDGs 達成度ランキング」

